

5 選択性緘黙 ～話せるけれど話せない～

(1) 選択性緘黙とは

選択性緘黙とは、本来、話す力を持っていないながら、心理的原因などで、特定の場面で話すことができない状態像を指します。基本的には、集団生活にうまく適応できない形の一つとも考えられます。教師は、単に「話をしない子」としてとらえずに、今、ここでは「話せない」のだと理解することが必要です。



緘黙の始まりは、入園、小学校入学時に集中しているので、特に幼稚園や小学校の担任の理解と対応はとても大切です。

(2) どのように対応すればいいか

まず、ほっとできる場・安心感を与えることです。教師は、そっと寄り添い、学校を家庭と同じような安心できる場にし、教師が安全を保障する役割を果たす必要があります。緊張や不安を取り除くために、楽しい雰囲気づくりに努め、集団活動に参加させたり、他の子に協力させたりする中で、友達とかかわっていけるようにすることが肝心です。

そして、何より大切なことは、決して、無理に急いで話をさせようとしな

いことです。言語以外のコミュニケーション手段を用いて、人間関係の調整を図ることもよいでしょう。

緘黙には、簡単な返事やうなずき・身振りで応答するもの、全く反応しないもの、体のこわばりなどが見られる重いものまで程度は様々です。そこで、どんな場面で話すのか、あるいは、話さないのかの境界線を見極めることです。できるだけ具体的な場面に照らして、相手による変化はあるか、状況による違いがあるか、それぞれの場面における緘黙の程度を知ることです。そこから、社会化への援助を目指し、長期的な取り組みを具体的に考えていくことです。また、長期化しがちなので、医療機関や専門機関との連携も必要となるでしょう。